

鈴木秀夫の風土論

高野 宏

I はじめに

「人間－環境」関係を広く意味する風土は、地理学専攻の学生・研究者にとって、とりわけ馴染みの深い言葉である。また、風土を研究対象とする、いわゆる風土論が地理学において重要な意義をもつことは、「地と人との諸関係についての新しい見解…をもたらす」（ブラーシュ 1940：41-42）という伝統的な学的目標と深く関係することから、概ね自明のこととして認められてきた。事実、和辻哲郎の『風土－人間学的考察－』（以下、『風土』）は、哲学・倫理学のみならず地理学においても古典の一角を占めており、風土の語を含んだ著作は、地理学専攻の研究者によって継続的に出版され続けている。たとえば、近年、風土産業や風土教育で知られる、三沢勝衛の著作集が「風土の発見と創造」という修辭を冠して新たに刊行されたことは、風土に対する根強い関心の存在を示している。このように、風土論は地理学において重要な一部門として十分に認識されており、研究活動も継続して行われている。

しかしながら、筆者は、地理学における風土論には重大な問題点が存在していると考えた。その問題点とは、同論がいわば「持論の乱立・放置」とでも表現すべき状況に置かれていることである。つまり、地理学における風土論は、（とりわけベテラン研究者の総合的・包括的な研究、あるいはエッセーとして）個別的に発表されることが多く、専門的で活発な議論の対象となることが稀であった。また、複数の風土論の著作が整理され、比較検討されることもなかった¹⁾。それゆえ、風土や風土性といったきわめて重要な概念ですら未だに統一的な見解が形成されておらず、風土を記述・分析する際の視点や具体的な方法論に至っては、研究者間における議論すら行われていない。風土論が地理学の根幹に関わる重要な議論であり、個々の風土論には優れた地理思想が潜んでいる可能性が高いと考えられる以上、こうした状況は決して好ましいものとはいえない。

以上のような問題意識に立ち、筆者は、地理学において提出されてきた風土論を順次取り上げ、内容を整理・検討する作業を行っている。その際、相互比較による概念や理論の摺合せを最終目標とすることから、特定の風土（たとえば「モンスーンの風土」）に対する具体的な記述内容ではなく、当該風土論に通底している理論と実践のあり方、すなわち理論的フレームワークと分析方法に着目している。高野（2010）では、「現代風土論」²⁾の嚆矢と位置付けられ、地理学における風土論の発展に多大な影響を与えた和辻風土論を取り上げた。結果、同論が「人間の

地理学」の精緻化から生まれた人文主義(現象学的)地理学の古典であり、いわゆる「生きられた世界」や「場所」の議論として、現代のラディカル(マルクス主義)地理学にも開かれた理論であるとの結論に至った。次いで、高野(2011)では、和辻風土論に対する批判から生じた千葉徳爾の「科学的風土論」を取り上げた。そこでは、風土を「社会的雰囲気」(=民俗)を核とする地域構造とみなす独特な理論的フレームワークや、客観性(西洋的思考)と主観性(東洋的思考)の結合といった特徴を明らかにするとともに、とくに理論面にみられる問題点を指摘した。

本稿は、かかる試みの継続として、鈴木秀夫の風土論(以下、鈴木風土論)を取り上げる。次章で詳しくみるように、彼はもともと、気候区分や気候変動に関する研究で知られる気候学(自然地理学)の研究者であった。しかし、1970年代半ばからは研究の方向性を大きく変え、風土や文化に関する著作を立て続けに発表するようになる。彼の目標は、「地表面全体の新しい気候学的知識を頭に入れた上で、風土をなお直観的に捉える」ことであり、その回答として二つの風土論を提唱した。一方は、『風土の構造』(1975)や『森林の思考・砂漠の思考』(1978)の後半部分で展開された、複数の主題図(気候区分図・分布図)を用いた風土論である。他方は、『超越者と風土』(1976)や『森林の思考・砂漠の思考』の前半部分、『気候の変化が言葉を変えた』(1990)、『気候変化と人間――一万年の歴史――』(2004)等を通じて提示された「文明論的風土学」(木岡 2011: 328)である。本稿では、紙幅の都合から、前者を対象を絞って論考を進めたい。

なお、鈴木は1970年代半ば～1980年代前半にかけての研究成果を認められ、1983年に日本地名研究所(所長:谷川健一)の風土研究賞を受賞している。また、幾つかの風土論関係の著作は、初版から数十年の時を経た現在でも版を重ねており、一般にも広く読者を獲得し続けている。これらから、鈴木風土論は地理学を代表する風土論の一つといえ、本稿において整理・検討する対象として適すと考える。さらにいえば、鈴木風土論は、その知名度の高さに反して、「性懲りのない(環境)決定論」(ベルク 1988: 141、括弧内は筆者)や「鈴木や安田(喜憲)は、風土学の旗幟を鮮明にすることと引き換えに、(環境決定論という)傍流の地位を甘受した」(木岡 2011: 328)などと論断されることも多く、従来、その成果や学説史的な意義を吟味される機会に恵まれてこなかった。このこともまた、筆者が第三の事例として鈴木風土論を取り上げる理由である。

II 鈴木秀夫の人物像

本章では、鈴木風土論に対する具体的な整理・検討作業に先立って、彼自身の経歴や研究課題の変遷、特筆すべきライフイベントについて略述しておきたい。それは、上述の風土論をめぐる状況からすれば、議論の背景をなす学説史から同論の検討を始める必要はなく、当該の研究者が一個人としてどのような経験を積んできたのかを知ることの方が、その背景に対する理解として適切であると判断されるからである。

(1) 鈴木秀夫の経歴

鈴木秀夫は、1932年、神奈川県横浜市生まれの地理学専攻の研究者である。もともとは気候学が専門で、世界・日本の気候区分の問題、第四紀を通じた気候変動の問題に取り組んでいた。

表1 鈴木秀夫の類型別著作数の変遷

(単位:本、冊)

	1950～1959	1960～1969	1970～1979	1980～1989	1990～1999	2000～2009
気 候 学	4	9	17(1)	2		
周氷河地形		4				
風土論・文化論			11(4)	9(3)	2(1)	3(1)
学 史	1		1		1	
随筆・紀行		8(1)	6	3	1	1
そ の 他	1	1	1	3(1)		
合 計	6	22(1)	36(5)	17(4)	4(1)	4(1)

注:括弧内は、鈴木 of 著作物に占める著書(翻訳・編著を含む)の数を示す。

出所:国立国会図書館および国立情報学研究所のデータベース(NACSIS Webcat、Cinii)を主な資料として用い、筆者が分類・集計・作成した。

ただし、後年に風土や文化に関する研究を展開したことから、彼が生涯を通じて取り組んだ研究課題は、周氷河地形の研究から言語分布の問題、文明論に至るまで多岐におよぶ。2011年にすい臓がんでこの世を去るが、精緻で専門的な研究論文のみならず、一般書やエッセーも数多く執筆し、実社会においても大いに活躍した研究者であった。

経歴面では東京大学と縁が深い。すなわち、1955年に東京大学理学部(地学科地理学教室)を卒業し、同大学大学院へ進学する。1年4ヶ月の西ドイツ留学(1958年10月から1960年1月)を経て、1960年に博士課程を満期退学。1963年に、東京大学に学位論文「Klassifikation der Klimaten in der Gegenwart und der letzten Eiszeit von Japan(日本における現在および最終氷期の気候区分)」を提出し、理学博士の学位を取得した。同年、東京大学理学部講師に着任すると、1993に定年退官するまで同大学で教鞭をとった。退官後は、清泉女子大学文学部教授に着任している。

特筆すべきライフイベントとしては、1965～1968年にかけてエチオピアのハイレセラシエ一世大学にて教育・研究活動を行ったことが挙げられる(東京大学は長期海外出張としてこれを扱った)。これは、「ドイツから帰国するときに、友人のエチオピア人に、エチオピアの大学に留学する方法はないものだろうか」と尋ねた¹⁾り、国王に直接渡航懇願の手紙を出すほど、鈴木が希望したことであった(鈴木1966:38)。当然、エチオピアでの経験は、以後の研究活動に大きな影響を与えることになる。そのほか、九学会連合による下北半島総合調査(1963～1964年)、第一次東京大学南米学術調査団(1971年)に参加したことも、少なからぬ影響を及ぼしたと考えられる。

(2) 研究課題の変遷

表1は、鈴木秀夫が著した論文・著書を「気候学」、「周氷河地形」、「風土論・文化論」、「学史」、

「随筆・紀行」、「その他」の6ジャンルに分ち、それぞれの著作数を年代ごとに集計したものである³⁾。これにより、鈴木の研究課題の変遷を把握することができる。以下、前項で述べた経歴やライフイベントと関連させながら、概観する。

1950年代は、鈴木が学部生・院生であった時期である。この時期の著作数は6である。カーン・トルロ論文の翻訳を除いては、全ての著作が気候学に分類される。上層高風・大雨・波浪等、いくつかの主題が見出されるが、「中気塊気候学への予察的研究」(1956)や「日本中部の気候区界について」(1957)が『地理学評論』ならびに『地学雑誌』に投稿されていることから、この時期の鈴木の中には博士論文の作成に向けて、とりわけ前線帯(気団)に着目した気候区分への興味・関心が高まりつつあったといえる。

1960年代は、西ドイツ留学の終了、博士論文の提出、東京大学への就職、エチオピアへの海外出張と、彼がさまざまなライフイベントを経験する時期である。研究活動にも拍車がかかり、著作数は22となる。この時期に注目されるのは、以下の三点である。

- ①初の著書『高地民族の国、エチオピア』(1969)の出版を含め西ドイツおよびエチオピアでの体験を記した紀行が多く執筆されたこと。
- ②気候区分の議論がより深化されたこと。
- ③「北海道北部の周氷河地形」(1960)を皮切りとして、周氷河地形(皿状地など)の研究にも乗り出したこと。

また、②に関しては、③への関心から、(現在の問題だけでなく)時系列的な問題への展開もみられた点が注目される(「低位周氷河現象の南限と最終氷期の気候区界」[1962])。

1970年代になると、鈴木の研究活動はピークを迎えるとともに(著作数は35)、一つの転機を迎えることになった。すなわち、風土論が新たに展開されたことである。『風土の構造』、『超越者と風土』、『森林の思考・砂漠の思考』、『気候と文明・気候と歴史』(1978)の4冊が立て続けに出版され、風土(自然環境)が人間活動等に及ぼすさまざまな影響が議論された。もちろん、彼の原初的な関心事であった気候区分の研究も、本格的に、第四紀期(とりわけ氷期とヒプシサーマル期)における気候の復元ならびに気候変動の研究へと発展している。いわば、風土論と気候変動の研究が、彼の研究活動における明確な二本柱を形成するに至ったといえる。

晩年(1980年代以降)には、両研究が統合されていくかたちで、風土論にさらなる深化がもたらされている。すなわち、気候変動と民族移動等の歴史的現象との関係が新たな切り口として着目され、「文明論的風土学」と形容される風土論が形成された。鈴木は1991年、『地理』に掲載された「地理学教室あんない」で、自らの専門を単に「気候学」とはせず、「最終氷期以降の地球環境の変化と、それによってひきおこされた人間の分布現象の研究」としている(鈴木1991: 81)。著作の面では、『気候の変化が言葉を変えた』や『気候変化と人間——万年の歴史——』が成果として出版され、ここに鈴木風土論の成熟期・完成期が認められる。反面、純粋な気候学的研究に分類されるものは著しく数を減じ、『気象研究ノート』に寄せられた「砂漠の変動」(1981)と、『生態A』(現代生物学体系12a)に寄せられた「気候区分」(1995)の概論的な二編が認められるのみである。絶筆と思しきは2003年の「自然現象としての人間の地域性」で、彼が「気候学

→風土論」という経歴の果てに到達した地理思想が端的に示される内容となっている。

(3) 風土論への機縁

それでは、気候学が専門であった鈴木を風土論へと導いた機縁とは何であったらうか。筆者は、それを第一にエチオピアでの興味深い事実との遭遇に求めたい。鈴木は、「アジスアベバにて」（1966）で次のように述べている。

「ニセバナナ…は、…アジスアベバよりもっと南の湿潤な地方の重要な食料である。…ニセバナナを主食とする人たちは原始的な宗教をもっていて、コプト派のキリスト教を奉ずるアムハラ族の支配を受けている。このアムハラ族は、アジスアベバから北西のアビシニア高原の上に紀元前から住みついているのであるが、彼らはテフという穀物から作るお好焼の皮のようなインジュラを主食としている。一方、エチオピア北東部の酷熱の低地には、イスラム教徒がいて、遊牧の生活をしている。

この三つの自然環境にそれぞれ異なった宗教があることが、エチオピアのきわめて特徴的な事実である。…この問題は地理学者にとってきわめて刺激的な問題であって、筆者がエチオピア研究にひきずりこまれた最大の要因にほかならない。」（鈴木1966：34）

このように鈴木は、自然環境の人間活動（文化）の様態および分布に対する強い影響力を目の当たりにした。彼は、西ドイツ留学を通じ、自然現象のみならず文化現象についても関心を深めつつあったと推測されるが、両者の関係性が形態として明瞭に表現されていることに驚き、気候学の専門家として新たな方向性を見出したと考えられる。鈴木風土論の嚆矢となる『風土の構造』の目的を記した一文、「人間は、人間の考えている以上に環境の産物であるから、人間の環境のなかで最も大きな意味を持っている気候の知識が、人間を研究し、また人間に関心のある人々に伝わって欲しい」（鈴木 1975：1）には、上に引いたエチオピアでの記述とのごく自然なつながりが感じられる。

しかし、エチオピアでの経験だけが、彼の研究に転換を促したのではない。第二に挙げられるのは、従来の気候学ならびに風土論に対する反省・批判である。これが鈴木風土論の直接的な（表向きの）契機になっていることは、『風土の構造』の冒頭に明記されている。

「気候学は空気の流れの学問として、戦後、急速に発達し、その関心は次第に、地表に実際におこる天気現象を離れて上層の動きに移り、地上への関心は、空気の運動の法則・規則を知った結果、それを通して予報すべき地上の点の気象に集中され、環境としての地表面の面的解釈には、かならずしも重点は置かれてこなかった。

一方、風土論においても、高温多湿、モンスーン、砂漠ということばが語られても、考察している一地域の環境として、地表全体からみれば、ほとんど点的に把握していることが一般的で、そこで論じていることが、同じ自然環境を持っているところでは、ずっと同じことが成り立つのかどうかは吟味されていないことが一般であるし、そもそも同じ自然環境がどこまで広がっているかという知識すら、明確でない場合が多いと思われる。」（鈴木 1975：8）

すなわち、鈴木が専門としてきた気候学においては、気候のメカニズムを面的に捉え、人間を取り巻く環境を明確化する機運に欠けていた。加えて、風土論（ここでは和辻風土論が想定さ

れている)においても、「モンスーン的風土」や「砂漠的風土」など、気候学的な地域区分が用いられているものの、その空間的広がりや自然科学的なメカニズムを問題とすることはなかった。鈴木は、このように課題ないし問題点を一部で共有しながらも、関わりを持たずに発達してきた両者を結びつけることで、新たな風土論を作り出そうとしたのである。

Ⅲ 主題図による風土の研究方法

本章では、主題図を用いた鈴木風土論の理念と分析方法について整理する。そのなかで、鈴木が風土を捉える際に用いた、理論的フレームワークの手がかりも得られる。

(1) 鈴木風土論の理念

鈴木は、自己が展開する風土論を、彼の気候学的研究のように、純粹に客観的ないし自然科学的な姿勢から成り立つ研究分野とはしなかった。その理由は、彼が和辻の『風土』と『倫理学』(1937-1949)を読み比べ、その所感を記した個所に示されている。以下に、その一節を引用する。

「直観でとらえたものが、客観的な手続で推論されたものに、劣るとは限らない。和辻哲郎は、『風土』を書いた後、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの『人文地理学原理』を読み、もしこれをはじめに読んでいたら、この『風土』は書かれなかったであろうと述べているが、『人文地理学原理』を読んだあとに書かれた『倫理学』下巻の「人間存在の風土性」の章には『風土』ほどの魅力はない。われわれが、自然と人間の関係を認識するのは、論証によらず、直観による部分が多いからなのであろう。」

(鈴木 1975 : 9)



図1 日本の気候区分

出所: 鈴木(1975)、p.119、第27図を転載。

このように、鈴木にとっての(和辻)風土論の魅力とは、「直観」による「人間-環境」関係の把握の仕方にあった。それゆえ、自然科学的な「客観的な手続き」や「論証」を風土論に徹底しようと、その魅力は大きく減ずると考えられた。そこには風土論を、厳密な「科学」とは異なった思考体系の一つとみなす鈴木の態度が窺われる。結果、「地表面全体の新しい気候学的知識を頭に入れた上で、風土をなお直観的に捉える」ことを「風土論の進まねばならない方向」(鈴木1975:9)とするに至った。ただし、現段階では、鈴木がいうところの「直観」が何を意味するのかは全く不明であるし、「客観的な手続き」や「論証」についても、科学的である

こと以上には具体的でない。

(2) 基本的な分析方法

鈴木が議論の出発点として記した和辻風土論では、「モンスーンの風土」では暑熱と湿気の結合が、「砂漠的風土」では極度の乾燥が、「牧場の風土」では「従順」・「明朗」なる自然が人間活動にとってそれぞれ重要な意味をもつと考えられた。しかし、なぜそのような自然環境が特定の地域に出現するのかについての考察はない。また、風土の広がりには、インドやギリシャ・ローマ、中国、日本等の国家と直接的に結び付けられ、自然のメカニズムと関連させて論じられてはいなかった。

そうした状況を問題とみた鈴木が第一に行ったことは、「人間-環境」関係のうちの一極、自然環境のメカニズムとその空間的な広がりを明確にすることであった。すなわち、『風土の構造』では、自らの前線帯に着目した気候区分の研究成果（鈴木1961など）を活かし、世界と日本における気候区分図が作成されている（日本のものを図1として転載）。ちなみに、自然環境のうちでも気候に着目しているのは、「最近の地形学では、地表面の形態は、巨視的にみると、地質条件によらず、気候条件によって決定されると考える」（鈴木1964：7）というように、彼が気候こそが自然環境の様態を決定する最大の要因とみていたことによる。この見解の正否は置くとして、この作業により、等質な「人間-環境」関係が形成される可能的な範囲が空間的に明確化されたことになる⁴⁾。

第二に、鈴木が行ったことは、さまざまな自然現象ならびに人文現象に関する主題図の収集である。そして、先に作成した気候区分図をベースマップとし、その上にそれらの一枚を重ね合わせてみる。結果として、両者のパターンに大きな一致がみられる場合、自然環境と当該現象との間には因果関係があると判断し、その因果関係に対する説明を展開する。これが、鈴木

風土論の基本的な分析方法であった。表2として『風土の構造』で主要な論題に取り上げられた主題図を示すが、彼が気候を起点に説明しようとした現象が広範に及んでいることが理解できる。

もちろん、文化に属する問題を、気候の作用から説明することに違和感を持つ者が多くいることは否定できない。この問題について鈴木は、以下のように述べている⁵⁾。

表2 『風土の構造』で取り上げられた主題図

番号	主 題	類 型	地域
①	物が腐食する速度の分布	物質	世 界
②	イナゴの孵化地の分布と移動経路	動物相	
③	アメリカのヒューマの体型分布	動物相	
④	アメリカの原住民の身長と座高の分布	人種の特徴	
⑤	アフリカにおける体重／体表面積の分布	人種の特徴	
⑥	エチオピアの宗教分布	文化	
⑦	イスラム教の分布	文化	
⑧	エゾユズリハ・ユズリハの分布	植物相	日 本
⑨	日本の土壌分布	土壌	
⑩	テントウムシの分布	動物相	
⑪	イエネズミの第一染色体の分布	動物相	
⑫	シモヤケの方言分布	文化	
⑬	離婚率の高低分布	文化	

出所：鈴木(1975)より作成。

「われわれの生理的存在が、まったく、気候に規定されていることは疑いないが、その器に宿るわれわれの精神の、もっとも深いところはわれわれにはわからないとしても、およそ人が議論することができる程度の深さまでは、気候の違いが関わっていると、私は考える。議論をすることができる程度とは、われわれの意識の上では、事実上すべてに近い。したがって、ほとんどあらゆることについて気候の違いの影響ないし作用を論ずることができる」(鈴木1975:69)

以上のように、鈴木風土論では、気候こそが自然環境中でもっとも強い営力であると位置付けられ、その人文現象を含めた多面的な影響を空間的に論じることが目標とされた。気候区分図と主題図の重ね合わせという方法は、「議論がたんなる空想の産物ではなく、事実に近いことを示す」最良の手段とされた(鈴木1975:69)。そして、こうした議論において、鈴木は「風土」を「およそ自然環境という意味に使っている」(鈴木1990:3)。

(3) 議論の具体例

それでは、気候区分図と主題図の重ね合わせという鈴木風土論の方法が如何に実践されているのか、主要な議論を具体例として紹介する。一つ目は、鈴木がエチオピアで遭遇した興味深い事実、すなわち、宗教分布と自然環境に関する議論であり、二つ目は、東北地方の離婚率の高さに関する議論である。これら二事例を紹介することで、彼がいう「直観」や「客観的な手続き」、「論証」の意味内容も明確になる。

a. エチオピアの宗教分布 図2は、エチオピアにおける気候の様態(降水量分布)と諸宗教の分布との相関関係を示したものである。

まず、鈴木はエチオピアを、①年間降水量500mm以下の乾燥地帯、②赤道西風の影響から年間降水量1500mm以上となるエチオピア高原南部、③両者の中間にあり、比較的乾燥しているエチオピア高原北部の三つに分ける。次いで、これらの地域区分とエチオピア国内における諸宗教の分布に一致を見出す。具体的には、①にはイスラム教徒が、②にはアミニストが、③にはコプト派のキリスト教徒が、棲み分けをなすように分布している。

こうした現象が発生した理由を説明する際、鈴木は自らの見解の提示に先立って、以下のような歴史学者の見解を示す。これは、もちろん、自論の正当性を対比的に主張するためである。ただ、厳密に一致する議論がなかったため、三者の空間的な棲み分けの問題ではなく、「エチオピア(高原)が、なぜ、イスラム化しなかったか」(鈴木1975:93、括弧内は筆者)という問題に対する

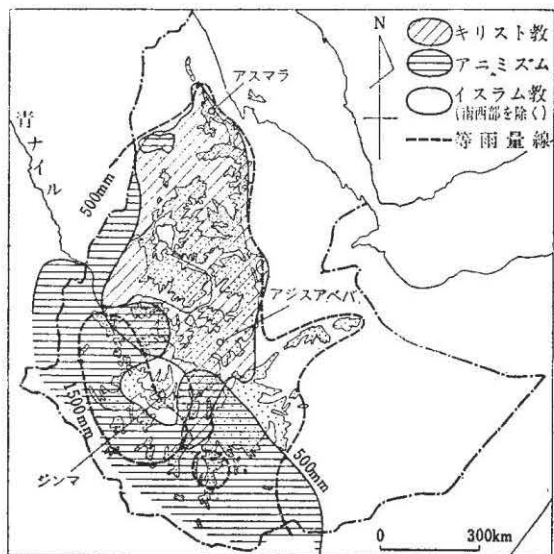


図2 エチオピアの宗教分布

出所：鈴木(1975)、p.92、第19図を転載。

歴史学者の見解となっている。

- ・西暦555年頃、エチオピアは象の大群を連れてメッカに攻め込み、同地を落城寸前まで追い込んだ。この事件は、コーランに「像の日」として記され、イスラム教徒のあいだにエチオピアに対する恐怖を植え付けることになった。
- ・エチオピア高原の地形が外敵にとって自然の障壁であったばかりでなく、エチオピアの兵士は実際にも勇敢かつ屈強であった。幾度ものイスラム教徒の「聖戦」を跳ね返し、近代におけるイギリスやイタリアの支配からも短期間で脱した。
- ・以上の二点から、イスラム教徒はエチオピアを攻め落とすことができなかった。結果、その教義をエチオピア高原の上まで広げることができなかった。

このように歴史学者は、エチオピア高原におけるキリスト教・アニミズムの残存をイスラム教徒の軍事的制圧の失敗、より正確にいうならば、軍事的制圧の失敗に至る歴史的イベントが形成する因果関係の連鎖により説明する。

それに対して、鈴木は、3地域における生業形態や生活環境の地域的差異に着目し、イスラム化の問題も含め、棲み分け現象の原因について三つの可能性を指摘する⁶⁾。

- ・主食の違いによる説明:エチオピア高原北部では、テフという穀物を主食とし、高原南部ではニセバナナを食べる。北部の乾燥地域では、羊やラクダの乳と肉に大きく依存している。これらの分布は、結局、降水量などの自然環境の差異に起因する。特定の信仰と食文化をセットとして持つ集団が隣接した場合、両集団のあいだには他集団の食物を不浄視する風潮が生じた。結果、三つの宗教は、各集団の食文化を維持できる地域までしか広まらなかった。
- ・生活環境の違いによる説明:降水量の違いから、エチオピアでは砂漠(エチオピア北部)・農耕地帯(エチオピア高原北部)・雨林帯(エチオピア高原南部)という三種類の生活環境が生じる。そして、生命が繁茂する森林地帯では、人は多神教やアニミズムを理解しやすく、砂漠では(イスラム教における楽園像が示すように)一神教を理解しやすいと考える。それゆえ、三つの宗教は、その教義に刻み込まれた自然的風土の刻印を脱してまで広がることはなかった。
- ・イスラム教徒の活動範囲からの説明:イスラム教は商人のあいだに広まった宗教であり、ラクダの商隊が移動できる範囲(砂漠)に広まったと考える。それゆえ、大都市もなく、商隊が通行できない高原にはイスラム教が布教されなかった。

これらの説明は、いずれも、二つの点で先の歴史学者の見解・手法とは対照的である。第一に、歴史学者が物事の時間的な連なりに着目するのに対して、鈴木は、関連すると推察される事物の空間的な広がりに着目する。第二に、歴史学者は物事の因果関係を問題とするのに対して、鈴木は、さまざまな物事の相関関係を問題としている。第二の点は鈴木風土論の研究方法をj知るために、とりわけ重要である。以下に図式化して詳述したい。

仮に歴史学がXからYへの影響を論じる場合、一義的に重要なのはXとYとのあいだに想定される因果関係とその真偽である。XがYを引き起こしたか否か、あるいは、中間項 α を介して

「 $X \rightarrow \alpha \rightarrow Y$ 」の因果関係の連鎖が証明されなければ、それは史実とはならない。それに対して、鈴木 の 議 論 の 場 合、 X と Y の 因 果 関 係 は 決 し て 一 義 的 な 問 題 と は な ら ない。問題となるのは、 X (降水量分布など) と Y (諸宗教の分布など) を つ な ぐ た め に、 X お よ び Y と 相 関 関 係 (同 じ 分 布) に 有 る 中 間 項 β を 適 切 に 設 定 す る こ と で 有 る。そ し て、歴 史 学 と は 異 な り、「 $X \cdot \beta \cdot Y$ 」と い う 本 来 並 列 さ れ る べ き 事 象 か ら、「 $X \rightarrow \beta \rightarrow Y$ 」と い う 因 果 関 係 が 推 論 的 に 導 出 さ れ て 有 る。

な お、エチオピアの事例を解説するなかで、鈴木が自らの方法を「地理学的——風土的解釈」(鈴木1975:93、傍点は筆者)と呼んでいる。このことは、鈴木の研究方法を考えるうえで興味深い。なぜなら、そこには、自己が提唱する風土論こそが地理学そのものであるとする強い意気込みとともに⁷⁾、それによって提示される見解が、厳然とした事実などではなく、推論から導出される「解釈」であるとの自認が看取されるからである。

b. 東北・北陸地方の高離婚率 鈴木による日本の気候区分は、図1として示した。彼は、そこに日本における離婚率の高低分布(図3)を重ねる。結果、離婚率が高い地域(主に東北・北陸地方)と裏日本気候区との分布上の一致が見出され、気候から離婚への影響、すなわち、気候と離婚との因果関係が問題とされるに至る。

鈴木 の 主 張 に 従 え ば、裏日本気候 X と 離 婚 率 の 高 さ Y の 因 果 関 係 を 成 り 立 た せ る た め に は、 X な ら び に Y と 同 様 の 分 布 (相 関 関 係) を 示 す 中 間 項 β が 探 し 出 さ れ る 必 要 が 有 る。そ こ か ら「 $X \rightarrow \beta \rightarrow Y$ 」の因果関係が類推される。

そ こ で、彼 は、① 隠居の居住形態、② 本家分家の序列と交際、③ 持家1世帯当りの畳数分布、④ 部屋の間取り型の分布という四つの主題図を用いた。そこから、(i) 隠居の子供夫婦との同居、(ii) 本家分家間における家格差と付き合いの永続性、(iii) 20~30畳におよぶ広い家屋、(iv) 広間型および広間の間取りの家屋といった複数の中間項を、分布の一致という理由から抽出する。そのうえで、以下のような因果関係の連鎖を結論として提出する。

- ・ 雪の多い裏日本気候区では、隠居(親世代)が別棟で寝起きすることは危険である。結果、隠居が子供夫婦と同居する形態が好まれるに至る【気候→(i)】。
- ・ 隠居と同居することは、「本家の力」(鈴木1975:138)の増大へとつながる【(i)→(ii)】。
- ・ 隠居と同居することが多く、「本家-分家」関係との交際が複雑となれば、それだけ人間関係が破たんす

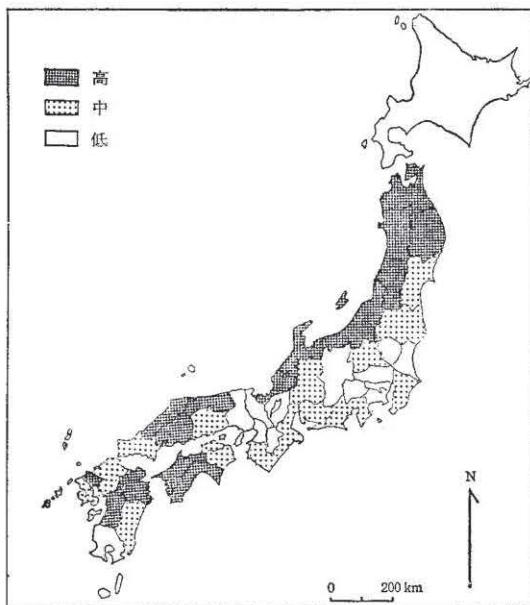


図3 離婚率の高低分布(1919-35)

出所：鈴木(1975)、p.135、第34図を転載。

る機会も多くなる。結果、離婚率の増加がもたらされる【(ii)→離婚率の増加】。

あるいは、次の説明も可能とされる。

- ・冬季の積雪が多い裏日本気候区では、戸外の生活が制限されるために、広い家屋に住むことが一般に好まれる【気候→(iii)】。
- ・また、同地域では、一つの大きな広間と複数の小部屋で構成される広間型間取りの家屋が好まれている。結果、冬季の締め切られた屋内空間で、隠居と子供夫婦がともに広間の囲炉裏を囲んで暮らす時間が長くなる。それは、隠居が嫁の批判に及ぶ機会を増やすことも意味し、人間関係の破たんを促進する一つの要因となる【(i) + (iii) + (iv)→離婚率の増加】。

どうであろうか。これらを非科学的な推論と解する人もいるかも知れない。

さて、この東北・北陸地方における高離婚率の事例は、「その『風土の構造』における「人間環境」関係の議論の中心を占める」議論と位置付けられており、鈴木自身が「時間のない方は、この部分から読みはじめていただきたい」と強く推す事例である（鈴木1975:1）。また、彼は『風土の構造』の「はじめに」で次のように述べている。

「外国から研修に来る学生に日本の話をする仕事を依頼されているが、多雪地帯と高離婚率との一致という事実を示して、その原因を推定させると、毎回、国によって異なった発言があって大変面白い。

この本をお読み下さる方々の御意見もうかがえたらありがたいと思っている。」（鈴木1975:2）

興味深いことに、この一節には、彼の風土論を通じて提示される気候からの因果関係について、他に可能な説明もあり得ること、翻っていえば、その説明が必ずしも正しいとは限らないことが示唆されている。事実、気候と離婚率の議論では、二つの異なった説明がなされている。

以上を踏まえていえば、鈴木という「客観的な手続き」ないし「論証」は、第一の事例における歴史的な方法論のような因果関係の直接的な証明を指している（ $X \rightarrow a \rightarrow Y$ ）。それに対して、鈴木が用いる「 $X \cdot \beta \cdot Y$ 」の相関関係を「 $X \rightarrow \beta \rightarrow Y$ 」の因果関係に置き換える手法は、この「客観的な手続き」や「論証」とは異なる。それは、「直観と洞察力によって、理論と情報の（不足という）足かせを断ち、決断にいたることができる場合がある」（鈴木1975:141、括弧内は筆者）とあるように、「論証」ではなく、「解釈」としての「直観」の仕事である。これらによって、「地表面全体の新しい気候学的知識を頭に入れた上で、風土をなお直観的に捉える」（鈴木1975:9）という所期の目的が果たされている。先ほど筆者は、鈴木議論を「非科学的な推論と解する人もいるかも知れない」としたが、そのような批判は、彼において当初から想定されたものであった。

IV 鈴木風土論の論理

鈴木風土論の方法とは、気候区分図と各種主題図の重ね合わせによって発見された相関関係を、中間項の設定と「直観」の作用によって、「気候-事象」間の因果関係へと変換するものであ

た。しかも、その因果関係に対する説明は決して単一ではなく、論者の数に応じて複数存在する可能性も示唆されていた。このような特徴を有する鈴木風土論は、如何なる論理に支えられているのか。本章では、「鈴木風土論の論理」と題し、上記二つの特徴を正当化するロジックを検討する。

(1) 因果関係を導出する論理—『気候と文明』に対する議論から—

相関関係から因果関係を導出する論理は、鈴木 の E. ハンチントン『気候と文明』(1938) に対する見解をみることで明確になる。まず、同書における議論の目的・分析方法・結果を要約する。

- ・ 目的：地球上で文明度に高低差が生じる理由を明らかにする。
- ・ 分析方法：

- ① 工場の生産能率(肉体活動)と温度・湿度の関係、陸軍士官学校・海軍兵学校の試験成績(精神活動)と温度・湿度との関係を調べ、人間活動に適・不適な地域の分布図を作成。
- ② 24ヶ国、200人に世界各地の文明度を問うアンケートを実施。「文明の分布図」を作成。
- ③ 上記二枚の主題図を重ね合わせ、分布の一致・不一致を検討。

- ・ 結果：気候が文明度を左右する。気候が人間活動に適した中緯度地域で文明度が高い。

以上の議論では、分布の一致という事実を手掛かりとして、「文明度」という非常に人文的な現象が気候から直接的に説明されている。このことから、『気候と文明』は、今日、多くの地理学者から環境決定論の典型として否定的に扱われている。

それに対し、鈴木は、次のような因果関係の証明をめぐる議論を展開してハンチントンを擁護するとともに、同論の展開可能性を示す(鈴木 1975: 82-91)。

- ・ そもそも因果関係は、それ自体としては証明されない。たとえば、横軸に気圧の変化をとり、縦軸にある病気の発生数をとって、ある明瞭な線が描かれた場合、多くの人はそこに因果関係を認める。しかし、それは単なる相関関係であって、因果関係ではない。この仮想的な因果関係をより確からしくするために、気圧の変化とある成分の血中濃度の関係を調べ、その成分の血中濃度変化と特定の臓器の動きの関係を調べるといふとき、中間項の設定によるメカニズムの解明が行われる⁸⁾。
- ・ ハンチントンの議論は、それと同様の議論を空間上で展開したに過ぎない。つまり、『気候と文明』が否定的に扱われているのは、その論理構造に問題があるのではなく、人々(読者)の心情が同論の結果を受け入れる状態に至らなかっただけである⁹⁾。さらに、ひとたび「環境決定論」や「悪い学問の代表」というレッテルが貼られると、学界において思考停止が起こり、同論を正当に評価しようとする機運が失われてしまった。
- ・ ただ、ハンチントンの議論にも問題はあった。第一に、議論の核となる主題図の作成方法が科学的に妥当でないことである。たとえば、物を作り出す作業や問題を解決する作業は、「中緯度人」が最も得意とする作業であり、全世界を対象とする環境評価の指標に適さない。第二に、中間項の設定がなされなかったことである。二枚の主題図を繋ぐ第三・第四の主題図を用いて、気候から文明の高低差が発生するメカニズムを説明すべきであった。それにより、同論は「もっとも有力」かつ「すぐれた論理構造」を得られたはずであった。

ここで注目されることは、『気候と文明』の分析方法が鈴木風土論のそれと基本的に同形である点である。すなわち、同書に対する擁護と問題点の指摘は、自らの風土論における正当性の主張であり、論理的構築の過程に他ならなかった¹⁰⁾。なお、ここでは、主題図の作成方法に関して科学的な厳密さを要求している点にも注意を払いたい。鈴木風土論の独自性は「論証」によらない「直観」であるが、その「直観」を働かせる前段階の作業（各主題図の作成ならびに比較・検討）は、あくまでも「客観的な手続き」の範疇に属することが理解される。

(2) 複数の説明可能性の担保

鈴木風土論は、気候区分図(X)と主題図(Y)との間にいかなる中間項(β)を置くかによって、因果関係に関する説明の内容が異なっていた。鈴木風土論がかように柔軟な性格を有するに至った背景には、上述のごとき因果関係の証明に対する認識に加え、鈴木が西ドイツへの留学経験を通じて出会い、自己のものとして吸収した、独特な学問観が存在していた。鈴木は、『森林の思考・砂漠の思考』において次のように綴っている。

「日本の科学者にとって、重い響きを持っていることのひとつに「真理の探究」というのがある…真理を探求するのが科学であるから、科学者は、間違っただけをいってはならない。自分が観察し、分析した範囲で、正確に物をいわなければならない。」（鈴木 1978：26-27）

「（西ドイツ留学では）「学問の自由」という言葉は、日本では、主として政治権力からの自由というように、厳そかに、荘重に使われているなかに過ごしてきた私にとって、ある講義をとるかとならないかというような、「軽い」次元で使われていることが、ひとつの驚きであった。「研究がいがしくて休講」という掲示の出ていることもあったそうである。これもアカデミッシュフライハイト（学問の自由）の一面であろう。

自由ということは、本来、軽やかなものではないだろうか。」（鈴木 1978:23-24、括弧内は筆者）

「砂漠の人間（西ドイツを含む一神教世界の人々）にとっては、「私にはどうみえるか」、「私はどう理解するか」ということがもっとも重要なことで、その見方、理解の仕方を他人に伝えるために、必要な資料を論理的にならべる。すなわち論文ができあがる。それが真理そのものであるかどうかは第一義的な重要性はない。ここに学問

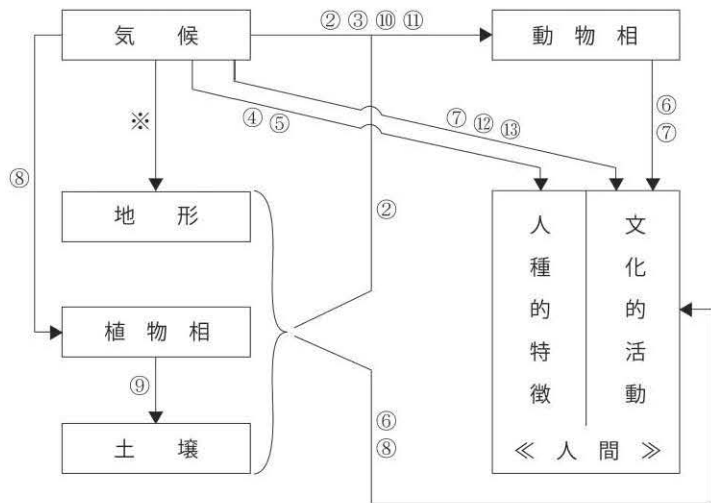


図4 鈴木風土論の理論的フレームワーク

注：図中の番号は表2の番号と対応する。
また、図中※で示した関係性は、鈴木(1964)、p.7の記述に基づく。

の自由ということの本質的な意義を感じているようである。この自由は、やはり軽やかである」(鈴木 1978: 27、括弧内は筆者)

つまり、鈴木は西ドイツの留学経験から、日本における学問観の窮屈さを実感した。反対に、西ドイツを含めた欧米流(「砂漠の人間」流)の軽やかな学問観、すなわち「アカデミッシュフライハイ」としての「学問の自由」に惹かれるとともに、それを自らのものとして内面化させていった。結果、「それが真理そのものであるかどうかは第一義的な重要性はない」、さらには、「(因果関係をはじめ、一切の)物事の証明はできない」ということを「学問の出発点」(鈴木 1978: 31、括弧内は筆者)とするようになり、「私にはこう思える式の論文」(鈴木 1978: 29)や、幾つもの説明可能性が担保されている議論に学問的な魅力を感じるに至ったのである。

V おわりに

本稿では、鈴木秀夫が展開した風土論のうち、複数の主題図を用いた風土論について取り上げ、その理論(理論的フレームワーク)と実践のあり方(研究方法)を探究してきた。最後に、その結果を図式的にまとめるとともに、鈴木風土論の問題点について筆者の意見を述べたい。

(1)理論的フレームワーク

図4は、『風土の構造』で取り上げられた主題をもとに、鈴木風土論の理論的フレームワークを図式化したものである(図中の数字は、表2の番号と対応する)。

この図から分かるように、鈴木は、気候が地球上の諸現象の様態を左右する根源的な因子と確信していた。気候は、それに伴う侵食・堆積等の作用を通じて地形を形成し、植物相の様態や分布を規定する。気候と地形によって規定された植物相は、土壌の分布を決定するとともに、気候や地形等の因子と相まって、動物相の様態に決定的な作用をもたらす。このように気候を出発点として形成される自然環境は、自らも動物の一種である人間に対しても複合的に作用し、結果として、人間の身体(人種的特徴)から文化的活動に至るまでを気候の影響下におさめている。鈴木「風土」が「自然環境」の謂いであったことを考えると、気候こそが「風土のなかの風土」であった。

こうした理論的フレームワークは、同論に対する環境決定論との一般的評価を体現するように思えるが、単純に判断できない面もある。たとえば、鈴木は、雑誌『地理』で次のように述べている。

「冗談に、自分のことを「ネオデターミニスト」ということがある。…デターミンというのは、「テルミニ(限界)を引く」ということで、「ある現象はあるテルミニの範囲で起こっている」と考えることであり、これは人間に居住限界があることから自明のことである。「決定」という日本語は、一対一の対応しか考えないというような語感があるから、自分のことを冗談にも決定論者とはいわないつもりだけれども、「デターミニスト」ならば良いのではないかと感じている。」(鈴木 1988: 15)

こうした記述を足掛かりとすれば、鈴木風土論は必ずしも環境決定論ではなく、比較的オーソドックスな環境可能論を指向するものであったともいえる。

(2) 分析方法

次いで、分析方法を図式化すると、図5となる。

彼の分析における第一段階は、素材となる二枚の主題図を準備することである。一方に気候区分図(X)を準備し、他方にはそれと相関的な分布を示す主題図(Y)を準備する(これ

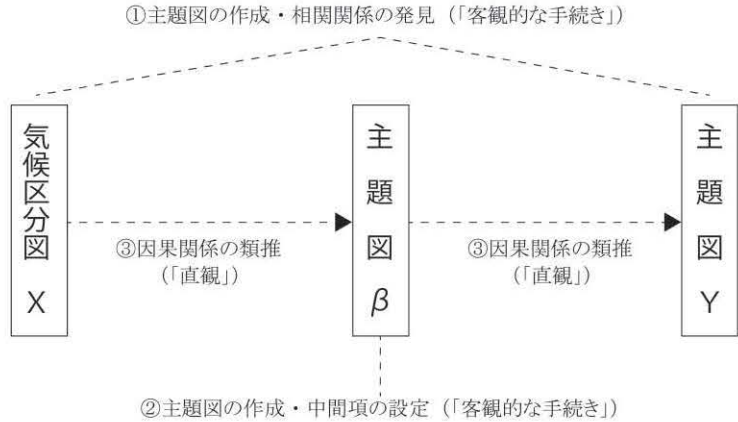


図5 鈴木風土論の分析方法

らの作成は「客観的な手続き」に基づく)。これにより、Yの規定要因が気候であること（「 $X \rightarrow Y$ 」の因果関係）が示唆されるが、それは中間項を媒介に、メカニズムとして説明される必要がある。そこで、第二段階として、 $X \cdot Y$ と相関的な分布を示す主題図(β)が作成・挿入される(β の作成も「客観的な手続き」に基づく)。結果、「 $X \cdot \beta \cdot Y$ 」の相関関係が検出され、それを「直観」によって「 $X \rightarrow \beta \rightarrow Y$ 」の因果関係に変換する(中間項が不足する場合、 $\beta' \cdot \beta'' \dots$ と継ぎ足す)。これが、鈴木風土論の第三段階であり、彼の科学観・学問観に根差した中核的作業である。なお、仮に中間項として別の主題図(θ)が挿入された場合でも、「私にはこう見える」という主張を形成できれば問題はない。複数の説明可能性を担保する点も、鈴木風土論の特徴であった。

(3) 理論面および実践面での問題点

理論面においては、次の二つの問題点が指摘される。

第一に、本来の鈴木風土論が環境可能論を指向しているにもかかわらず、自然環境に対する人間の認識の様態や、人間活動が自然環境に与える影響(図4の矢印とは反対の営力)がほとんど考慮されていないことである。人間は、「環境の子」としてのみ描かれている。この問題点は、仮に、鈴木自身の経歴が気候学を基礎に形成されたことや、鈴木風土論が「(人間の)ほとんどあらゆることについて気候の違いの影響ないし作用を論ずることができる」(鈴木 1975: 69、括弧内は筆者)との信念に基づく、環境としての気候の重要性を主題とした議論であったことを踏まえたところで、十分に克服されるとは思われない。かかる一方的な関係性の主張が原因となり、後年、環境決定論との誤解じみたレッテルが同論に貼られることに繋がったと考えられる。

第二に、鈴木が「直観」を風土論の魅力としながら、それを理論面では活かせなかったことである。もちろん、「直観」は、鈴木風土論の中心をなす鍵概念ではあった。しかし、それは実践面においてであって、風土の構造やメカニズムを捉える理論的な視座においてではなかった。結果、同論の理論的フレームワークは、きわめて客観的でオーソドックスな地人相関論に収まっている。仮に、鈴木が正しく和辻流の「直観」を取り入れるなら、それを「我れを中心とする環

境的空間」(和辻 1965:186)たる風土を生起させる主体的作用として受け入れ、人間を「環境の子」として描くのみならず、環境を「人間の環境」、すなわち人間(社会)に帰属するものとして描く必要があった。

実践面においては、主題図の重ね合わせというエクステンシブな研究方法にこだわり、インテンシブな研究方法が顧慮されなかった点が挙げられる。その背景には、「日本の学問の伝統は職人氣質の上に立っていて、一芸に秀でた人間をたっとぶ雰囲気があるから、(欧米のように)総合家あるいは、エクステンシブな研究をする人間は育ちにくい」(鈴木 1978:189、括弧内は筆者)という日本的学問への反発があったが、いずれかの研究方法で議論を完結する必要はなかったと考える。主題図の重ね合わせ、相関関係の発見を議論の皮切りとして、インテンシブな調査(個別・具体的な事例研究)へと移り、特定の現象に対する気候の影響を証明する可能性もあった。歴史的な事象を対象とする等、インテンシブな研究方法が採れない場合に限り、鈴木の研究方法が最良となる。

以上のような問題点があるにせよ、鈴木風土論には一定の意義が認められる。第一には、一種のタブーとして忌避されてきた、自然環境が人文現象に与える影響の問題を、地理学の根本的問題として議論の俎上に載せたことである。これは、気候学の専門家としてキャリアを積んできた鈴木にのみなし得たことである。第二には、主題図が有する説得力を高く評価し、「分布の成立の「原因」とその「時」を探るという問題」(鈴木 1978:219)を「諸学に共通して残された巨大な、テラインコグニタ(未知の世界)」(鈴木 1978:193)として提示したことである。この点は、地理学の独自性や有用性が問われる今日、正当に評価されてよいと考える。これらが、同論が厳しい批判にあいながらも、地理学における風土論の代表として広く認識されている所以であろう。

なお、本稿では鈴木が提示した二つの風土論のうち、一方しか取り上げることができなかった。彼が研究者人生の終盤に結実させた「文明論的風土論」については、次稿にて取り上げたい。

【注】

- 1) 近年、木岡伸夫によって風土論の相互比較を含む研究(『風土の論理—地理哲学への道—』[2011])が出版されたが、そこでは地理学における議論は十分に検討されていない。
- 2) 「現代風土論」という用語、ならびに、和辻風土論をその嚆矢と位置づける見解は、千葉(1979)に基づく。
- 3) 国立国家図書館および国立情報学研究所のデータベース(NACSIS Webcat、Cinii)を主な資料として用いた。共著の出版物(単行本)に所収された論文、英文論文に関しては、用いた資料の性質から漏れがある可能性がある。
- 4) 和辻が「風土」において提出した風土の三類型は、『風土の構造』において以下の地域内で発生する可能性があることが示唆される。①「モンスーン的風土」：雨期に熱帯西風の影響下に入り、乾季にその影響下から脱する地域(アリソフのET気候区)。②「砂漠的風土」：年間を通じて熱帯収束帯(ITC)もポーラーフロントも到達しない地域(アリソフのTT気候区)。③「牧場の風土」：冬季にポーラーフロントが通過し、夏季に熱帯収束帯が到達しない地域(地中海性気候の地域)。
- 5) また、別の個所では、多くの人々が抱く違和感とは、「人間の存在に気候条件の違いが関わっていること」を強く主張することが、「人間の精神の偉大さ」に影を投げてしまう(鈴木1975:69)ことから生じる不安にすぎないとも解説されている。

- 6) ただし、これらは鈴木独自の見解でなく、シムーンズやプラノールの説に基づくものである。
- 7) 「地理学の風土」（1977）にも「本書のテーマは、いわば地理学の地理学のようなものであるが、ほぼ同義語の、風土という言葉でおきかえた」（鈴木 1977：12）とある。
- 8) 「因果関係は実在すると思うが、証明はできない。ただ我々は相関関係を知ることができるだけであると思う。相関関係の提示によって、因果関係の存在を認めるか否かは、個々の決断の問題である。」（鈴木 1978：195）という記述もある。
- 9) 中緯度文明の優位を認め、植民地支配を是認する懸念などが否定的な心情を醸成したとされる（鈴木 1975：88）。
- 10) 鈴木は『風土の構造』の冒頭で、「気候と他の分布現象との関係…は、ハンチングトンの「気候と文明」論が批判されていらい、ほかならぬ地理学者の間では、ほとんどタブーに近い危険なテーマになってしまったため、かえって安心して論ずることができる」（鈴木1975：85）と述べる。ここからも、鈴木風土論の原型が『気候と文明』であったと理解される。

【文献】

- ・ 木岡伸夫 2011. 『風土の論理—風土哲学への道—』ミネルヴァ書房.
- ・ 鈴木秀夫 1961. 気候区分の諸問題. 地学雑誌70(5)：9-13.
- ・ 鈴木秀夫 1964. 北海道の気候地形. 地理9(9)：7-12.
- ・ 鈴木秀夫 1966. アジスアベバにて. 地理11(9)：34-40.
- ・ 鈴木秀夫 1975. 『風土の構造』大明堂.
- ・ 鈴木秀夫 1978. 『森林の思考・砂漠の思考』日本放送出版協会.
- ・ 鈴木秀夫 1988. 環境決定論というタブー. 地理33(10)：13-17.
- ・ 鈴木秀夫 1990. 『気候の変化が言葉をかえた—言語年代学によるアプローチ—』日本放送出版協会.
- ・ 鈴木秀夫・田辺 裕 1991. 地理学教室あんない. 国立大学編5. 地理36(10)：81-85.
- ・ 高野 宏 2010. 和辻風土論の再検討—地理学の視点から—. 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要30：313-332.
- ・ 高野 宏 2011. 千葉徳爾「科学的風土論」の再検討. 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要31：205-225.
- ・ 千葉徳爾 1979. 風土論. 千葉徳爾・初山政子『風土論・生気候』. 3-58. 朝倉書店.
- ・ プラーシュ、P. 飯塚浩二訳 1940. 『人文地理学原理 上』岩波書店.
- ・ ベルク、A. 著、篠田勝英訳 1988. 『風土の日本—自然と文化の通態—』筑摩書房.
- ・ 和辻哲郎 1965. 『倫理学 上』岩波書店.